

ブリッジ・ノート

この課題では、授業で扱わなかった教科書の章を一つ選ばなければならない。あなたの課題は、それぞれの章で扱われている道徳理論について、およそ 500 語の比較的考察を書くことである。

これは、以下の二つの作業を行うことを意味する。

1. その章に見られる道徳観を再構成し、説明すること。その理論は、道徳的主張をどのように基礎づけているのか。何を（道徳的に）重要なものと見なしているのか。道徳的判断や意思決定をどのように行うべきだと考えているのか。
2. その道徳理論を、授業で扱った別の道徳理論と比較・対照すること。これは、以下のいずれかを行うことを意味する。

- 一見似ている理論同士の間には存在する、本質的な対立や緊張関係を特定すること。例えば、アカン倫理と儒教倫理は、どちらも人格に関心を持っているにもかかわらず、どのように異なっているのか。また、なぜそのような違いが生じるのか。

- 一見異なる理論同士の間には存在する、実質的な収束を特定すること。例えば、ロスの義務論と道家思想は、表面的には大きく異なって見えるにもかかわらず、何らかの共通点を持っているだろうか。その共通性は、どのように、そしてなぜ生じるのか。

重要：この二つの部分は同じ比重で書かれているが、実際に作業の大部分が存在するのは第二の部分であり、もっとも大きな洞察を示せるのもそこだ。理論の再構成は、理論同士を実質的に結びつけるために必要だが、この課題の本当の目的は、その関係づけ自体にある。したがって、語数配分もそれに応じて計画すること。再構成を無難に行い、最後に比較を付け足しただけの論文では、この課題の目的を十分に達成したことにはならない。

実質的な関係づけとは何か

似た理論同士の間にある本質的な緊張関係とは、単に「x について意見が異なる」ということではない。重要なのは、多くの構造や動機づけを共有しているにもかかわらず、なぜ最終的に異なる方向へ進んでしまうのかを説明することである。興味深いのは、その分岐を生み出している根本的な違いとは何なのか、という点である。つまり、重なり合う領域があるにもかかわらず、どのようなコミットメント、前提、あるいは理論的圧力が、その分岐を生み出しているのか、ということである。

異なる理論同士の間にある実質的な収束とは、単に「どちらも y を重視している」ということではない。その収束が偶然ではなく、より深いコミットメント、構造的特徴、あるいは理論的圧力によって説明されるべきものである、という主張である。つまり、異なる出発点から出発した二つの理論が、なぜ同じ地点に到達するのかを説明する必要がある。

いずれの場合も、目標は理論同士の関係について構造的な主張を行うことであり、単なる類似点や相違点のリストを作ることではない。

よくある失敗

- 最大の失敗は、退屈な収束や対立を提示してしまうことである。つまり、誰も反対しないような内容であり、それを認めても何も新しいことが導かれない場合である。「カントもミルも、道徳が重要だと考えている」は収束ではあるが、同時にまったく面白くない。自分に問いかけてみること：私はこの理論間の関係について、誰かが反対しうるようなことを本当に言っているだろうか。そこから何が導かれるだろうか。もしそうでないなら、そこには何も賭けられておらず、その関係づけは意味のあることを何も言っていない。

- 教科書そのものが提示している標準的な対立——その章を読めば誰でも見つけられるような、よく知られた対立——をなぞるだけでは、何も付け加えていない。この課題のポイントは、自分自身の洞察を使って、教科書が述べていないことを見出すことにある。
- 類似点と相違点を列挙するだけでは、「関係づけ」にはならない。重要なのは、なぜその比較が示唆的なのかについて、一つの構造的主張を提示し、それを擁護することである。
- 対立や収束についての主張は、さらに別の哲学的観察を支えるものでなければならぬ。もし、その関係づけを見つけても、どちらの理論についても既知のこと以上のものが得られないのであれば、その関係づけは実質的ではない。

なぜこれらの章が授業で扱われていないのか

この課題で授業未扱いの章を使う理由は、独立した哲学研究においてもっとも重要な技能を訓練するためである。それは、まだ誰にも解説されていない一次資料から、理論の構造を十分に明確に抽出し、その理論を他の立場と実質的に関連づけられるようになることである。もし両方の章が授業で扱われていたなら、あなたは授業内で共有された再構成に依存できてしまう。この課題のポイントは、その作業を自分自身で行い、その分析を用いて、さらに新しい結論や洞察を導き出すことにある。